

ゆたんぽ

桜丘逢村

冬の朝は体温が足りない。私は寒い部屋の中で震えながら、暖房が効いてくるのを待っていた。じっとして動かないから寒いのだということはわかっているが、既に冷え切ってしまった身体を動かすのは困難であった。そういう時私は、布団にくるまって本を読むことにしていたが、ある日それができなくなった。急に左足の甲が激しく痛み出したのである。それは皮膚ではなく骨の痛みであった。まるでそこに埋められた針金が磁力によって外に出ようとしているかのような不気味な痛みであった。ズキズキと、おさまっては発作を繰り返し、痛みが来る度に私は悲鳴を上げた。原因はわからなかった。冷え切った足を手でさすり、痛む部分を温めると、痛みはひいた。おそるおそる手を離し、足が冷たい空気に触れると、再び激痛が走った。私は耐えきれなくなり、足を引きずって風呂場に行き、湯の中に足を入れた。すると痛みは完全になくなった。やはり冷えのせいだった。

どういうわけか、私の左足の甲は、冷えると激しい痛みの発作を繰り返すようになった。それも毎度苦しみの雄叫びをあげてしまうほど痛いので、おちおち外出もできなくなった。とにかく冷やしてはいけないので、私は常に両手で左足を温めていなければならなかった。そのうち治るだろうとたかをくくり、私は引きこもって安静することに決めた。

ところが一週間経っても、痛みは治らないどころか、ますます激しくなった。家の中をすら移動するのが困難な生活が続いた。一日中風呂を沸かしている訳にもいかないし、勉強しなければならなかったので、私は痛みの発作に怯えながら机に向かっていた。勉強ははかどらなかつた。常に片方の手で足をさすっていなければならなかった。私の部屋にはストーブがないので、暖房はエアコンに頼るしかないのだが、部屋の下の方は温まらないので、足はいつも冷えていた。あんまり長いこと辛い生活が続くので、私は嫌になった。なんとかしなければと思った。

病院に行こうと思ったが、歩けないので行けなかった。私は友人の介護を受けたくはなかった。いつだって問題は一人で解決するのが常であった。私はどうすれば足を常時温かくすることができるか考えた。それも内側から温めなければ。痛みがきれいさっぱりなくなるのは、熱い湯船に入っている時だけであった。身体全体が隅々まで温まらなければ、この痛みはけっしてとれることはなかった。

身体を動かして体温を上げるという方法を思いついて、問題は解決したかに思われた。私は足を引きずって無理矢理外出した。すると数分歩いただけで、痛みはひいた。そのうち普通に歩けるようになった。やはり寒いからといって動くのをやめると身体はダメになってしまうのだ、と結論して、私はこの不可解な経験を教訓に、もっと外出する機会を増やそうと思った。私は学校の図書館に向かった。

しかしその安心も束の間、学校につくや否や、痛みは復活した。もはや我慢して歩ける程度ではなかった。私はその場で座り込み、足をおさえたが、表情は必死で平常を保とうとした。あまりの激痛に涙が出てきた。私は唇をかみしめ、声を押し殺していた。このままずっと座り込んでいたら不自然なので、私は困った。公衆に注目されるのは嫌だったし、他人に情けをかけてもらうのも辛かった。私はただ痛みがひくことを願った。知人が誰も通りかからないことを願った。

しかしそういう心配をすると、遭遇するものである。太った知人が苦しんでいる私を発見した。12月だというのに彼は半袖でいた。彼は心配そうに私に声を掛け、顔をのぞき込んできた。私は目をそらし、動揺を悟られないように努めた。しかしこの状態で隠しとおすのは不可能だと思ったので、「足がひどく痛むんだ」と正直に言った。状況を簡潔に説明した。「最近運動不足で身体を冷やしていたのがいけないらしい。歩けば体温が上がって治ると思って出てきたんだが、効果がないみたいだ」

「冷え性かい」と彼は聞いた。

「うん。そのうち治ると思うから、心配しないでいいよ」と私は言って、彼が立ち去るのを願った。彼の名はポーキーといい、私が所属するクラブの幹部で、いわゆる仕事バカであるが、恩を売るのも好きであった。おせっかいが大好きだった。他人の思想をいいとこ取りしただけの意見しか持っていないが、それで悟りを得たようにやたらと説教くさい教訓を垂れるのが癖であった。自分が重大な人物だと本気で信じていた。

「君、無理しちゃいけないよ」ポーキーは言った。「病院には行かないのかい？身体を大事にしないといけないよ。保健室まで運んでやろう」

「いいから。ポーキーくんは忙しいんだろ。ベックでも呼ぶから、大丈夫だよ」ここでベックの名を出したのがいけなかった。ポーキーから逃れたい気持ちが強く出過ぎていた。ベックは活発な美青年で、ポーキーは不潔なデブだが、彼がベックに嫉妬しているのは仲間内では明らかであった。ポーキーが得意げに「ぼくはクラブの会計報告書を作成して、それを自費で30名分刷って、来年度の新入生歓迎説明会の司会の練習もしようと思っていたけれど、そんなことより君を助けなきゃ」と言って私の手を自分の肩に回そうとした。私は手をひっこめた。彼は明らかに恩を着せようとしていた。これを機会に、義理を発生させようとしているのがはっきりわかった。なぜなら彼は、私の手を取って肩に回しながらも、学内の木々にクリスマス用の装飾を施している女学生から目を離すのをやめなかったからである。彼がただクリスマスおぼけの圧力によって親切を安売りしていることは明白であった。この時期に彼に借りを作るとは非常に危険なことであった。宴会で自分を犠牲にして彼を接待しなければならなくなるからだ。私はそれよりはと、激痛をこらえて立ち上がった。「ほら。治った。大丈夫だから」と顔をひきつらせながら言った。

しかしポーキーの力は強かった。私は女性のように軽々と持ち上げられ、彼の腹と私の体の左側はぴったりとくっついていて、彼が汗をかいているのがわかった。そこから熱がじわじわと伝わり、服が湿ってくるのを感じた。彼の体は異常に熱かった。学生たちは私たちが通り過ぎた後で指を指し、ゲラゲラと笑った。その内の一人と目があったが、彼の軽蔑の視線が私の心に突き刺さった。下から見たポーキーの顔には、自己満足の醜い笑みが浮かんでおり、その目は絶えずきょろきょろして、すれ違う女の子を追っていた。人に見られる恥ずかしさと気味の悪いデブに抱かれている屈辱とで、私の体温はみるみる上昇し、左足の痛みがずっと消えたのがわかった。しかし私はそのことよりも、一刻も早くこの公開処刑を中止しなければならなかった。私は彼に、恥ずかしいので下ろしてくれるようにと懇願した。

ポーキーはその後数十分も私を連れて行こうとがんばっていたが、私は彼が今日やるべき仕事の重要性を強調し、彼の有能ぶりを過度にほめあげると、納得した。彼は「でも、苦しくなったらいつでも呼んでくれよ」と言い残して去った。「困った時はお互い様、なんだからな」と。

私の足はすぐさま冷却し、激しい痛みが走った。「ちくしょう、あのデブにだけは見つかりたくなかったのに」私は彼が見えなくなった瞬間に座って足をおさえたが、思わず愚痴が漏れた。のたうち回ってもよいのではないかと思うくらい狂気的な痛みが私を襲った。私はまた足をひきずってタクシーを呼び、ベックの家に行った。

ベックは家で寝ていたが、快く私を迎えてくれた。足が痛いことを話すと同情したが、特に何の治療法も思い浮かばなかった。だが彼は安易に病院に行けと言って気の毒な友人を追い払うような冷酷さを持っていなかった。彼は、自分にできることがあるんだろう、だから来たんだろうと言ってくれた。

「だから君が好きなんだよ、ぼくは」と私は言って「ゆたんぽを貸してくれ」と頼んだ。彼は喜んで貸してくれた。数日間、この器具に足を縛り付けて温め続けた結果、痛みは和らいでいき、やがて完全になくなった。私はベックに大変感謝した。しかし、もう一人感謝しなければいけない人物がいた。ポーキーである。なぜならば私は、ポーキーの熱っぽい体躯に抱かれているまさにその時に、この器具の存在を思い出していたからである。私は後日ポーキーに会ったとき言った。「この前はありがとう、ポーキー」と。私は分厚いコートを着ていたが、彼はぱつんぱつんの薄手のカーディガンしか羽織っていなかった。